様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３０４２

研究課題名（和文）近代日本における郷土史家・郷土史料群（文庫）の研究

研究課題名（英文）A study of local history researchers and local historical materials in modern Japan

研究代表者
羽賀　祥二（HAGA, SHOJI）

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：３０１２７１２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、愛知・岐阜両県における戦前の郷土史家、郷土資料の調査と研究を目的とした。特に、愛知県の代表的な郷土史家、津田応助の収集した資料及び著作・原稿などを収蔵している小牧市立図書館の「象山文庫」の調査を実施し、目録作成、主要資料の撮影などを行って、文庫の全容を把握しつつ、今後の津田郷土史研究の性格を把握する準備を整えた。また、津田と「象山文庫」に加えて、愛知県西加茂郡の郷土史家、田中正幅、岐阜県の郷土史家、神谷道一らを取り上げつつ、戦前日本の郷土史研究をテーマとしたシンポジウムを開き（2018年十月）、その成果を『年報近現代史研究』に特集として掲載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、戦前における郷土史家と彼等が収集した地域資料に関する基礎的な調査と研究をめざした。埋もれた郷土史家を発掘し、その郷土史研究の水準を確認することは、19世紀から20世紀前半の日本の地域文化の進展を確認することであり、他方で、日本の歴史学の発展を考察上で欠かせない作業である。本研究では、愛知県の津田応助の「象山文庫」、西加茂郡長を長年勤めた行政官の立場で郷土の歴史研究に貢献した田中正幅、明治期の岐阜県の郡長で合戦史研究の先鞭を付けた神谷道一など、注目すべき郷土史家の収集資料と文庫・著作の概要を把握しえたことは、今後のこの地域の歴史と文化の研究に裨益すると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed at basic research on the local history researchers and the local materials collected by their researchers. Excavation of the local history researchers and confirmation of the level of local history research is to confirm the development of Japanese regional culture from the 19th century to the first half of the 20th century. We focused on local history researchers who have not received much attention in the study of local history. We were able to investigate the materials and works collected by these local history researchers and analyze their contents. I was able to examine the achievements of Osuke Tuda,Masanori Tanaka and Michikazu Kamiya, who worked on local history research.

研究分野：日本近代史

キーワード：郷土史家　郷土資料文庫　津田応助　神谷道一　田中正幅　地域史研究

１．研究開始当初の背景

19 世紀以降日本において知識人や実業家が収集した史料群（文庫）は数多く存在している。東海地域について言えば、三河の国学者の羽田野敬雄の羽田文庫、愛知県西尾市の実業家・岩瀬弥助が創設した岩瀬文庫などは大量の文献･史料を所蔵した図書館的機能をもつ文庫である。それらは名古屋市の寺院・宝生院の大須文庫や、尾張藩が受けついできた蓬左文庫と並んで、この地域の豊かな文化蓄積を示す遺産となっている。そして現在もそれら史料群の精力的調査が続けられ、そこから新たな知見が見いだされつつある。

こうした著名で、圧倒的な分量を有する文庫とは別に、本研究では郷土史の研究家たちが収集した史料群（文庫）を対象として、いまだ十分に知られていないそれらの史料群がどのように収集され、郷土史の研究に活用され、あるいは現在まで継承されてきたのかを検討する。明治以降近代歴史研究が展開していく中で、歴史学は郷土史研究へとその裾野を広げ、民間での歴史学が大きく花開くことになった。1880 年代から 1950 年代にかけて独力に近い形で歴史学を民間で推しすすめた郷土史家たち（丹後の永浜宇平、滋賀県の中川泉三など）は、実に精力的に史料収集を行って、それらを自らの研究に縦横に活用していった。永浜と中川に加えて、また愛知県東春日井郡小牧町（現小牧市）の郷土史家・津田応助の編纂した郡誌の構成、郷土史叙述の特徴などを検討した。さらに、明治 20 年代に愛知県西三河地域の郡誌編纂に当たった郡長田中正幅の郷土史の特徴や同地域の他の郡誌との比較検討を行ってきた。愛知県内の明治前期に編纂、刊行された郡誌は、大正から昭和初期の、明確な歴史観を背景に、歴史・考古の史資料を収集し、それらを駆使して叙述された大部な郡誌と異なって、小学校教育のなかで教科書として利用された郡誌である。　永浜や中川が活動していた明治後期から昭和戦前期は「郷土史」､「郷土教育」に時代である。『郷土史家人名事典―地方史を掘りおこした人々』（2007 年）は 1000 名を超える郷土史家の略歴と著作を載せるが、永浜宇平の名はここにはない。比較的よく知られた郷土史家であっても、いまだ本格的な論究がないのが実情である。

こうした現状の中、申請者は 2014 年から厦門大学人文学院・同民間歴史文献センターの鄭振満教授、陳永福副教授と地域史料の収集・整理・保存に関して、日本と中国において共同調査と意見交換を行ってきた。2014 年には両氏とともに愛知・岐阜両県内の博物館・資料館を訪問して、日本における地域史料の管理状況を視察し、また 2015 年には申請者が厦門大学を訪問して教員・大学院生などに向けて日本における地域史料上の問題に関して講演を行う機会を得た。そして今後も地域史料に関する共同研究を続けていくことを確認した。他方､10 数年来、華東師範大学（上海）の王暁葵教授とは、日本・中国における史蹟保存・歴史地震の共同調査を実施しており、その際重要な参考文献として地域史料の発掘と活用を進めてきた。こうした共同調査を本研究についても継続し、日中両国における地域史研究の基礎となる諸史料の収集・保存に関する比較研究を行う予定である。

申請者が所属する「近現代史研究会」では、2015 年度に「地域史研究の現状と課題」をテーマとした 10 周年記念大会を開催した。そこでは郷土史研究機関（愛知大学郷土研究所）の実績と現状、自治体史研究と教育史、近代化遺産と地域史研究に関する報告を受けて、地域史研究の課題に関する意見交換を行った。この大会を通じて地域史研究を支えている多様な人々の存在と長年にわたる努力、史料・遺産の保存と継承に関して不断の努力が必要だと再確認した。そしてそのためには 19 世紀以降の地域史研究の歴史について再認識することが重要な課題であると認識するに至った。

２．研究の目的

本研究は、明治中期から昭和戦前期にかけて編纂された郡誌･市町村誌を悉皆調査し、愛知・岐阜両県で活動した郷土史家、編纂方針と体制、編纂を支えた郡教育会や小学校長などの協力者、東京・京都両帝国大学の歴史家の指導・協力のあり方を検討して、戦前期日本の郷土史編纂体制について総合的な知見を得ることを目的とする。また、両県内で著名な郷土史家（神谷道一・津田応助）の収集した史料群（文庫）を調査し、史料群の特徴を明らかにする。彼ら郷土史家は欧米から紹介歴史学・考古学・民俗学の知見を援用ており、そうした学問的基盤についても検討する。また日中両国の地域史料の現状と問題点に関する意見交換を実施する。

３．研究の方法

（1）明治中期から昭和初期にかけて郷土史の研究、それを支える史料の収集に尽力した郷土史家の役割を明らかにすることである。これまで評価されてきた郷土史家はごく少数であり、田中正幅・津田応助・神谷道一などの大きな業績を上げた郷土史家の活動は、その著作は知られているものの、活動の内容はまったく分かっていない。しかも彼らの背後には小学校長・教諭など、無名の調査協力者がいる。こうした郷土史の編纂を支えた地域社会の協働の実態を解明することが課題となる。

（２）郷土史家が編纂に際して収集した史料群の構造を解明することである。これまで申請者が事前調査を行ってきた史料群は、明治前期に岐阜県各地の郡長を歴任した神谷道一の文書、愛知県で『東春日井郡誌』､『小牧町史』などを編纂した津田応助の「象山文庫」である。これらの史料群については、すでに目録も作成されている。現文書、筆写史料、関係文献、考古資料など多様性があり、これら史料群について、収集史料の特徴、収集の方法、収集先、収集時期などを丁寧に検討し、史料群としての特徴を解明することである。

（３）たとえば津田応助は、『東春日井郡誌』（1923 年）、『小牧町史』（1926 年）の他、東春日井郡の地租改正反対運動の指導者であった林金兵衛の伝記などを著した郷土史家であるが、彼もまた精力的に考古遺物も含め大量の郷土資料を収集して、それは戦後「象山文庫」が設立され、収蔵されることになった。最近になり山田図書館長が独力で目録も作成し、文庫資料も公開されるに至った。津田応助については、申請者はすでにこれまで履歴や郡誌・町史の内容構成の検討などを行い、他方、福武財団の研究費で「林金兵衛文書」を整理、目録作成する中で、津田による林金兵衛研究についても検討した経過がある。
（４）近代日本における郷土史研究の担い手と学問的背景、史料収集・活用の様相を解明し、その成果に基づいて中国における地域史研究の課題に対して、有用な知見を提示することである。振教授らによれば、中国における地域史料の収集・保存の体制はようやく作られようとしており、厦門大学の民間歴史文献センターはそのために創設された機関である。また王教授は中国における民俗学研究の発展のために、20 世紀日本の民俗学の成果を中国に紹介しようとしており、いずれも日本における歴史学・民俗学の経験と知見が必要だと述べている。申請者は中国と比較しながら、日本における地域史研究の歴史と現状について再確認するとともに、地域史研究のレベルでの研究交流を行いたいと考えている。

４．研究成果

本研究は、明治中期から戦前期にかけて編纂された郡誌・市町村史の調査、及びそれに携わった郷土史家の活動とその遺産を調査・研究することを目的としている。本研究では、特に愛知県・岐阜県の二つの県を対象にしており、平成 28 年度においては、愛知県内の郷土史家・郷土誌の調査と研究を実施した。年度内における作業の概要は次の通りである。
（１）戦前から戦後にかけて愛知県を中心に活動し、多くの郡誌・町村史編さんに従事した津田応助の残した資料を調査し、小牧市図書館に所蔵されている「象山文庫」の重要資料の撮影を実施し、画像データの分析をはじめた。また、「象山文庫」は小牧市図書館で一応の目録が作成されてきたが、いまだ目録未掲載の書簡類などがあり、この調査を進めていくことで、小牧市図書館と協力しつつ、目録の完成をめざしている。また津田が著述した『小牧町史』などの原稿類があり、出版された町史との比較、著述過程を知りうる材料となることを確認した。こうした新たに発掘した資料を通じて、は郷土史家の歴史像構築のプロセスの検討を開始した。
（２）愛知県内の地誌・郡町村史に関して、特に明治期の郡誌の記述内容について検討を加え、その成果の一部を『愛知県史　通史編近代Ⅰ』において発表した。
（３）津田も自ら調査に主眼の一つを置いた尾張藩の幕末維新史関係資料として、田宮弥太郎家の『田宮文書』の寄贈を受け、その整理作業を行った。これについてはすでに目録化は終了しているが、『田宮家文書の研究』として刊行した。
（４）日本における地誌編纂は中国の影響を多大に受けているが、中国における地域史研究に関する知見を深めるために、中国海洋大学マスコミ学院の日本研究者及び青島市档案館の研究者と交流する機会を持ち、地域史資料や研究の現状について教授を得た。また、中国海洋大学における日中文化交流に関するシンポジウムでは、「明治維新と中国」と題して報告を行い、近世後期における中国地誌・中国政治思想が幕末維新期の政治改革に与えた影響を論じた。
（５）平成 29 年度には、東海地域における郷土史家についてのシンポジウム「郷土史家の仕事とその遺産」をテーマに、10 月 14 日に名古屋大学文学研究科において近現代史研究会の拡大例会として開催した。このシンポには、白井哲哉氏（筑波大学）、山田久氏（小牧市図書館長）、可児光生氏（美濃加茂市民ミュージアム）と申請者が報告を行い、近代の郷土史家の歴史的位置とその役割、郷土史家の多様性、現存する郷土史資料の様相などについて、それぞれの立場で報告した。このシンポの内容は平成 30 年 5 月刊行の『近現代史研究』第 10 号に掲載した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）
羽賀祥二「明治期地方行政と郡町村誌の編纂」『近現代史研究』第 10 号、2018 年）

〔学会発表〕（計 1 件）
羽賀祥二「明治期地方行政と郡町村誌の編纂」近現代史研究会、2018 年 10 月

〔図書〕（計 5 件）
羽賀祥二他『愛知県史通史編近代Ⅰ』（愛知県、2017 年）
羽賀祥二編『近代日本の地域と文化』（吉川弘文館、2018 年）
羽賀祥二編『近代日本の歴史意識』（吉川弘文館、2018 年）
羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫編『名古屋と明治維新』（風媒社、2018 年）
羽賀祥二編『「田宮如雲関係文書」の研究』（羽賀祥二、2019 年）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。